2012年（平成24年）
第55号
（7月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

地球にやさしいエネルギーを～ガス科学館に学ぶ～　新宗連京都・地球環境学習会

6月25日（月）、新宗連京都府協議会は毎年実施している「地球環境学習会」を行った。前回までは京都市の各清掃工場を見学し、ゴミ問題に取り組んできたが、今回はエネルギー問題を取り上げ、大阪ガスのガス科学館を見学した。

朝8時すぎに京都駅南口に加盟教団から27名が集まって、バスに乗車して大阪・高石市に向かった。10時ごろに大阪ガス・泉北製造所・第二工場内にあるガス科学館に到着した。

最初に大阪ガスの会社の説明を受け、展示館内を見学し、液化天然ガス（ＬＮＧ）の特性や技術について学んだ。そして、ＬＮＧで動くバスに乗って第二工場敷地内の施設を見学した。

ガス科学館にて展示館を見学

大阪ガスでは、泉北と姫路の二つの工場で製造した都市ガスを、総延長約60,000㎞のパイプラインで関西2府4県の700万戸超に届けている。また、ＬＮＧによる発電や液化酸素、液化水素の製造など、クリーン・エネルギーの取り組みを目の当たりにした。

午後からは、一行は吹田市に移動して、アサヒビール吹田工場を訪問した。原材料から万全な品質管理の下、製造されるオートメーションのラインを見学した。

アサヒビール工場を見学

中でも、ビールの製造過程で発生する副産物や廃棄物を100％再資源化しており、環境に配慮した企業姿勢が見られた。

見学後、製造されたばかりの生ビールを試飲しながら、一行は親睦を深めた。

工場前で記念撮影

法輪クラブによる教会玄関に咲いた蓮の花

お知らせ（８月の教会行事）

８月　１日（水）朔日参り・布薩の日　9：00～
　　４日（土）開祖さまご命日　（各地区）
　　５日（日）平和祈願の日　9：00～
　　１０日（金）脇祖さまご命日　9：00～
　　（佐藤教会長による大法座）
　　１５日（水）戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日　9：00～
　　２５日（土）～２６日（日）
　　壮年部大聖堂当番団参
　　２８日（火）～２９日（水）　議員交流会

時事刻々

七月十七日は祇園祭の山鉾巡行が行われる。京都教会青年部もボランティアとして、役行者（えんのぎょうじゃ）山を曳くことになっている▼祇園祭は祇園御霊会と呼ばれ、平安期の八六九年、疫病が流行した時、その退散を祈願して長さ二丈ほどの矛六十六本を立てたのが始まりという▼山を曳く青年たちは、六月二十四日に八坂神社でお祓いを受けた。神事に従事する者として、心身を清めて臨むことになる▼曳き手不足が問題になる中、「歴史・伝統文化の継承」「青少年の社会参加と健全育成」を理念とし、京都・祇園祭ボランティア二一活動を始めて二十九年になるという▼ボランティアというと「奉仕活動」の意でとらえられている。「奉仕」には「神仏に仕える」という意味がある▼山鉾巡行には五百人ほどのボランティアが参加するという。彼らが一時であるが、「奉仕」により神に仕えることを身につけるのも経験だ。

原発事故を受け　本会が声明を発表

本会は6月18日、「真に豊かな社会をめざして―原発を超えて」と題する声明（下掲）を発表した。

大飯原発の再稼働を機に、脱原発・原発推進と世論を分ける状態にある。この問題を政治的にとらえるのでなく、信仰者としての考え方を示したものである。多くの犠牲を払うことになった原発事故から何を学ぶかを踏まえ、自然と人との共生による心豊かな平和な社会の実現を目指すとしている。

真に豊かな社会をめざして――原発を超えて

東日本大震災によって多くの方々が最愛の人を奪われ、住み慣れた故郷を離れ、苦難の生活を余儀なくされています。立正佼成会は、犠牲となられた方々の御霊（みたま）の安らかなることを祈るとともに、被災地の方々をはじめ、その家族や親類の方々に寄り添い、精神的・物質的支援に努めてきました。被災地の方々は懸命に復興への道を歩まれていますが、その悲嘆と苦悩は、言葉では言い尽くせないほど大きなものがあると思います。

とりわけ、東京電力福島第一原子力発電所事故により、福島では多くの方々が生活や家庭の基盤を失いました。事故発生直後の混乱と不安の中で、それまで地域社会で育まれてきた人と人とのつながりは引き裂かれていきました。胎児や子どもへの放射線の影響を心配しているご家族は数えきれません。多くの母親が今も胸を痛めています。また、今回の事故は近隣諸国をはじめ世界の人々に大きな不安をもたらし、未来世代に計り知れない多大な負担を残しました。

原子力は「未来のエネルギー」と言われ、私たち国民もその恩恵を受けてきました。しかし、ひとたび事故が起きれば、甚大な被害をもたらすことを思い知らされました。経済的な豊かさが人間の幸せの源泉であると信じ、原発の負の部分から目を背けて、その依存度を高めてきた責任は私たち一人ひとりにあります。私たちに問われていることは、原子力発電によらない、真に豊かな社会を可能な限り速やかに築きあげていくことです。そのためには、より安全性の高い再生可能エネルギーの開発と活用に叡智を結集しなければなりません。しかし、一番大切なことは、多くの犠牲の上に際限なくエネルギー消費を拡大してきた価値観や生活スタイルを見直すことです。今こそ、過剰な消費を抑えた「少欲知足（足るを知る）」の心を養い、簡素な生活の中に幸せの価値を見いだす最大の機会であると考えます。

世界は今、文明の転換を迫られています。これまでの経済的・物質的な豊かさを求める生き方を続けていては、限られた地球環境を守り、未来世代によりよい社会を残していくことはできないでしょう。また、貧富の格差が広がる今日の経済や社会のあり方は、人類全体にとって決して幸せなものではありません。私たちの生き方のものさしを「共生」や「自然との調和」、すべての人が安心して暮らせる公正な「分かち合いの経済」などの実現に変えていかなければなりません。

立正佼成会は、すべてのいのちを尊び、慈しみ、自然と人間との共生に基づく心豊かな平和な社会の実現に向け努力してまいります。これこそが今、仏教徒として私たちの果たすべき菩薩行と信じるものであります。

平成２４年６月１８日

立正佼成会

かめおかこころ塾　35回&36回

「家族形態の変化の中で地域の絆づくりを」（Vol.35）

6月9日(土)、ガレリアかめおかにおいて亀岡市民新聞社主催、かめおか宗教懇話会共催による35回になる「かめおかこころ塾」が開催された。

今回の講師は天理教山陰大教会責任役員の岸田作(つくる)氏。「進む高齢核家族化、そしてひとり暮らし＝絆の回復をめざして＝」と題して講演を行なった。

講師自身の民生委員の体験から①高齢者核家族と若年層核家族の二分化、②家族内で問題があったときに解決できる力（家族力）の喪失、③家族内で行なってきたことが外に求められる家族機能の外注化の進展を指摘。それらの解決策として、高齢者の社会参加活動（地域ボランティア）を挙げる一方、宗教が助け合いの社会を構築すべきだと提言した。

最後に天理教では「感謝・慎み・助け合い」を大事にした生活を送っていると述べた。

「原発再稼働問題」緊急講演会（Vol.36）

7月7日(土)、大本本部みろく会館において『かめおか宗教懇話会』の総会が行われた。その後、36回目の「かめおかこころ塾」が開催された。

講演会は、「原発再稼働問題」についての緊急講演会とし実施された。講師は原発問題の市民運動を展開している広瀬隆氏。「いのちの水『琵琶湖・保津川』を守れ」と題して講演が行われた。福島原発事故以降、政府や電力会社に不信を感じる人びとも多い。講師の経験から原発が抱える課題を説明した。

さらなる活躍を期す　～乙訓明社総会～

6月24日(日)、長岡産業文化会館で「乙訓地区明るい社会づくり運動の会（乙訓明社)」総会が行われた。

平成23年度の活動報告と決算報告があり、会員の了承を得た後、役員改正が行われた。引き続き新役員が挨拶に立ち、乙訓明社の発展に取り組む意気込みを語った。その後、平成24年度の事業計画と予算案を満場一致で議決して、総会は終了した。

●器（自分の器を知りなさい）

（佼成会のことば）

「器」とは、その人の徳分――もっとわかりやすくいえば“心の器量”を表した言葉です。私たちは自分と他人を比較して、つい不平不満の心になりがちです。そのような時、佼成会では「自分の器を知りなさい」とか、「一升マスには一升しか入らない」などと言って戒めたものです。この言葉には、功徳を積んで自分の器を大きくするという意味も込められています。要は、地位や名誉にこだわることなく、その才能に応じて、与えられた条件の中で精いっぱい人に尽くしていくことが大切だということを教えた言葉です。

今月の言葉　～家族の絆が親孝行、先祖供養の原点～　京都教会長・佐藤益弘

校成誌７月号において、「家族の絆」という会長法話をいただきました。

その前段の「瓜食めば」というところでは、まず、「家族とは何か」についてお話くださっています。それは、「日本の伝統的な家族観は、親孝行の『孝』の文字に象徴されています。子が、老（親）を下から支えている字の形が示すように、子が父母を敬い、よく仕え、親が子を愛し、いつくしむ、その情で結ばれているのが家族です。本会で『親孝行』と『先祖供養』が尊ばれているのも、このような日本的な家族観と無関係ではありません」と述べられています。そして、万葉歌人の一人である山上憶良の「瓜食めば　子ども思ほゆ　栗食めば　まして偲はゆ　何処より　来りしものそ　眼交にもとな懸りて　安眠し寝さぬ」という歌を通して、親子をはじめとする家族の敬愛の情が大事であり、その心こそ、家族の絆を形成する根幹であると教えてくださっています。

ここでは、日本における理想的な家族像について教えてくださっています。それも儒教と仏教が基底となって生み出されたものと学ばせて頂きました。同時に、それは神仏が授けてくださった宝だとも思います。

後段の「敬愛の糸を紡ぐ」というお話の中では、重要なお言葉をくださっています。それは「つまり、家族がお互いに磨きあい、いたわりあって紡いでいく敬愛の糸が『家族の絆』ということです」と説いて頂いています。ここに、今月のご法話の表題である「家族の絆」の意味が明確に示されています。

そして、家族の絆が断たれないためには、たとえば夫が読経供養をきちんと課すことであるとお話されています。そのことを通して、夫であり、父である主人が率先して真心からのご供養をさせていただくという務めを果たすことは、「敬う姿」であると思いました。加えて、妻がなごやかな物言いでふれあうことを忘れないこととありますが、妻であり、母である人が明るく楽しいムードメーカーとしての働きをすることは、「愛の姿」そのものであると受けととめさせていただきました。そのように「敬」と「愛」の夫々の糸が結ばれ、絆となり、強固なるがゆえに断たれることはなくなるのだとの思いを新たにしました。

さらに、家族の絆のみならず、本会の教会が地域共同体の核として、サンガの内外を問わず近隣の人びとの間に思いやりの絆を結ぶ大切さについてもお話くださっております。つまりサンガにおいて、一人ひとりとの絆により、希望と安心がもたらされると共に、そこから更に広がって、明るい社会の建設がなされることが肝要です。また、宗教協力という絆を通じて世界平和を築くというように家庭から地域、社会、国家、世界へ向けて菩薩行のネットワークを広げていきましょうと、会長先生から促して頂いたものと思わせて頂きました。

そして、会長法話の締めくくりとして、「こうした真に相手を思いやる行いは、いずれも慈悲の実践にほかならないのです」と結ばれています。今月は盂蘭盆会の式典がございます。親、先祖を敬い、感謝の気持ちをもって真に思いやる行いが、盂蘭盆供養であると思っております。家族の絆がしっかり出来てこそ、真心からのご供養が申し上げられます。そういう意味では、家族の絆が親孝行、先祖供養の原点であると私は受けとりました。

今月は、とくに家族の敬愛の情を大事にしつつ、いつでも、どこでも、誰に対しても慈悲の実践ができる人間として精進させて頂きます。

合掌

祇園祭のボランティアに多数参加

明るい社会づくり運動の会は、7月14日～16日の夜、祇園祭のゴミ分別回収のボランティアに参加する。各地区明社から数10名が参加する予定。

7月17日の山鉾巡行の当日、新宗連京都府協議会青年部から、山鉾曳きのボランティアに参加する。四条傘鉾と役行者（えんのぎょうじゃ）山と伯牙（はくが）山に合計10名が参加して山鉾引きを行う。

同じく、京都教会青年部は役行者山に10名がボランティアとして参加する。

6月度議員懇話会を開催

6月28日（木）、早朝7時から京都教会において議員懇話会が開催された。今回は20名が参加。7人の議員からスピーチがあった。

植田幹事長は、早朝からネズミ捕りと交通事故を見たことから気をつけようと述べ、護国神社に特攻隊の碑の文を書いたこと、特攻隊6万人の1割は京都からだったことを報告。隠塚議員は、ベトナムのクエに子供の家という大学進学率が高い養護施設を建てて運営しているは、元小学校教諭の日本人。海外で頑張る日本人がいることを知らせる必要を感じたという。

まとめで佐藤教会長は、メンバーのスピーチから「『見聞即知菩提に通ずる』という。見るものはすべて自分にとって有り難い気づきになる」と述べた。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《日々これ法燈の継承》

時代が変わり、人が変われば組織も変わっていかなくてはならない。若い者が意欲をもってやらなければ、時代を救う宗教活動はできない。そのためには、多少の失敗はあっても若い者に任せなければならない。庭野開祖が、ようやく法燈継承の機が熟したと心を決めたのは、この年の３月のことだった。

創立記念日式典の２日目、立正佼成会の会長位を委譲することを発表した。法燈継承は、もちろん会長位の委譲だけではない。教会長指導の席上で、日鑛新会長はその自覚を述べた。**「仏教教団にとって『法燈継承』とは、法を永遠に存続させる重大な意味を持つのものです。教団がその動きを停止させれば正法は断絶・喪失してしまいます。立正佼成会は、本来の仏教教団、釈尊が説かれた正しい仏教のあり方を打ち出していく役割があると思います」。**

法燈継承祝賀会には、海外・国内の宗教者、さらに政財界をはじめ、各界から 850 人もの方々が参列して下さった。来賓を代表して山田恵諦天台座主、福田赳夫元総理、ポール・リーブス世界宗教者平和会議国際委員会委員長が、お祝辞を下さった。山田恵諦座主は**「宗教家にとって 85 歳は準備完了して、いよいよ出発という人生最良の年齢です。今後も変わらぬ宗教協力による平和活動をお願いしたい」**と、会長位は譲っても楽隠居にならぬようにと、庭野開祖を励ました。

海外からお祝いに駆けつけて下さったたくさんの方々を代表して、40 人の外国の宗教者の方々が「世界平和に対する立正佼成会の貢献、役割、そして展望」というテーマで、様々な視点から、これまでの佼成会の業績を評価し、これから佼成会が進むべき方向について示唆を下さった。

さらに翌日は、「立正佼成会に提言する」というテーマで「法燈継承記念シンポジウム」が開かれ、飯坂良明・学習院大学教授、ホーマー・ジャックＷＣＲＰ名誉事務総長、北畠清泰・朝日新聞大阪本社企画報道室長、マルコ・ビアネロ・キオド・ユニセフ事務局次長、真田芳憲・中央大学教授、田澤康三郎・松緑神道大和山教団教主の６氏から、立正佼成会への忌憚のないご意見と、アドバイスを頂くことができた。

田澤康三郎氏は、立正佼成会のこれからについて、こんなアドバイスを下さった。「今こそ、宗教の相互理解による国民皆信仰への行動を起こすことを、すべての宗教者が考えなくてはならない時だ。私は『三つの窓』の話を聞いたことがある。底窓、横窓、天窓の三つの窓で、『底窓』は苦悩、迷いを省察する窓、『横窓』は世の苦悩や嘆きを洞察し常寂光土を願う窓、『天窓』は何もかも当たり前とする凡常心を破り、感謝の念をもってすべての生き物と共存することを願う、敬虔な心の窓だという。

不安や悲しみを抱えた人々に手を差し伸べて、天窓からの光で希望と法悦に導かなければならない。富士登山は５合目までは車でもロープウエイでも行ける。これからの宗教者は、５合目から同行相励まして頂上をきわめる案内人として、奉仕の行を積み続けなければならない」

ホーマー・ジャック博士は、こう話して下さった。「立正佼成会は今後、よく国際的、多宗教的環境で仕事をしていくことで信者の精神性をより充実させていくことができるだろう。**組織化された宗教は、聖職者としての側面と、予言者の側面の両方をそなえるべきだ。立正佼成会に置き換えれば、法座グループの活動と、国連での仕事の両方を重視しなければならない。**

個人に安らぎを与え、癒しを与えるのと同時に、日本をよりよいものにし、世界をよりよくするための貢献をしていかなければならない。そのバランスが重要だ。バランスを保つために革新し続けることをおそれてはならない。佼成会の伝統を保持しながら、同時に、あえてそれを乗り越え、礼拝に新しい洞察や新しい儀式を取り入れることも重要だろう」

真田芳憲先生は、佼成会のこれまでの歩みを法華経精神の現代的再生の歴史であるとして、その活動を三つに大別し、今後の活動についての期待を述べられた。**「第一に、万教同根の精神に基づく法華経の一仏乗の実践。第二に、在家釈尊教団として在家仏教運動を社会の各層に浸透させ、国民皆信仰に大きな役割を果たす活動。第三に、明るい社会づくり運動、世界宗教者平和会議など法華経を基盤とした平和運動の実践。**

立正佼成会は教団として安定期に入り、安定期は硬直化、形式化、希薄化が起こりがちだ。こうした弊害に注意して草創期、拡張期の活動の維持の為の組織・人材育成の見直しこそ大切だ」と、誠に有難いお言葉を頂いた。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

万物に質量を与えるとされる「ヒッグス粒子」が発見されたと話題になりました。宇宙空間にその存在が予言されながら発見には至ってなかったそうです。また一歩、物質生成の秘密が解明されていくと思います。しかし私たちの目に見える星などの物質は宇宙の 4%しかなく、目には見えないが 23%を占めるとされる暗黒物質、さらに多く存在するダークエネルギーは未解明です。宇宙の大生命は科学で解明されるでしょうか。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/